

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19520213

研究課題名（和文） 18～19 世紀エクフラシスの歴史的・理論的考察

研究課題名（英文） Historical and Theoretical Study on 18th to 19th century Ekphrasis

研究代表者

鈴木 雅之（SUZUKI MASASHI）

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号： 50091195

研究成果の概要（和文）：エクフラシスとは、芸術作品などの言葉による「鮮やかな描写」のことである。ギリシャ・ローマに端を発するこのジャンルに属する作品を歴史的に辿り、イギリス・ロマン主義時代のエクフラシス作品を具体的に分析した。作品描写に与える王立美術院（1768）等の政治的影響も考察した。考察対象をさらに広げ、ロバート・フック著『ミクログラフィア』（1665）の顕微鏡的表象とくに顕微鏡観察記録というテキストは、エクフラシスとして捉えなおすことができると示唆した。

研究成果の概要（英文）：Ekphrasis is a vivid description in words of visual arts. After a brief description of its genealogies from ancient Rome and Greece, detailed analyses are made about ekphrastic poems in the English Romantic age. How they are subject to influences from a political institution such as Royal Academy of Arts (1768) or from the status quo is gauged and discussed. It is also suggested that microscopic representation, in particular vivid descriptions of objects in Robert Hooke's Micrographia (1665) should be taken as a different form of ekphrasis.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：エクフラシス、美術カタログ、ディレクタント協会、芸術家協会、王立美術院、政治と美術制度、姉妹芸術、詩は絵のごとく

1. 研究開始当初の背景

|

「エクフラシス」(ekphrasis)とは、《詩は絵のごとく》(ut pictura poesis)理論に欠かせない修辭的技法のひとつとして、聴衆の心目の対象物(絵画に限定されない)を生き生きと彷彿させる言葉による「鮮やかな描写」のことである。「エクフラシス」への関心は今日国内外共に高まりつつあるが、独立した研究書は海外では Murray Krieger, *Ekphrasis*(1992)を除けばきわめて少ない。国内では皆無である。Kriegerは、エクフラシス=時間芸術、芸術作品=空間芸術というテーゼに束縛されすぎており柔軟性に欠ける。エクフラシス研究はまた、「姉妹芸術」研究と切り離すことはできない。文学と絵画、テキストとイメージとで成立する姉妹芸術に関する海外における研究には、長い伝統と学問的蓄積がありその代表的研究書として Jean H. Hagstrum, *The Sister Arts* (1958)がある。しかし Hagstrum は、絵画と文学の影響関係、双方の類似関係を指摘することだけに終始している。我が国においても、18世紀からロマン主義時代の姉妹芸術に関連する文献がないわけではないが、学問的に信頼でき海外輸出競争力のあるまとまった研究書はまだ出ていないと思われる。

2. 研究の目的

(1) 姉妹芸術からエクフラシスへ

本研究では、先ず、姉妹芸術論の要をなす《詩は絵のごとく》の主題が、ギリシャ・ローマ時代からルネサンスを経て18世紀およびロマン主義時代にいたるまで如何なる変遷・変貌を遂げたかを史的に考察する。John Dryden, Alexander Pope, James Thomson, Thomas Gray等における姉妹芸術論の特徴を、当時の絵画理論・審美学理論(崇高論・ピクチャレスク論など)をも考察の対象としつつ概観する。《詩は絵のごとく》を巡る具体的な言説を、18~19世紀のイギリスを代表する風景画家 T. M. W. Turner と John Constable にも検証する。

(2) エクフラシス研究

Homer, Virgil, Philostratus the Elder らによる微に入り細を穿った絵画の「記述/描写」(エクフラシス)を綿密に分析する。さらに18世紀からロマン主義時代の詩人たち(William Bowles, William Wordsworth, P. B. Shelley, John Keats等)によって書かれたエクフラシス群を詳しく考察しその働きを解明する。姉妹芸術からエクフラシスへと研究対象を移すことが、どのような意味をもちどのような問題を孕むか等についても併せて考察する。

エクフラシス研究においてこれまで注目されてこなかったものとして、「展示美術カタ

ログ」がある。カタログは、展示作品ひとつひとつの解説を蒐集したいわばエクフラシスの宝庫である。カタログ研究は緒についたばかりであり、王立美術院展覧会カタログ研究は、国内外においても皆無に近い。我が国では、フランスにおける美術カタログを扱った島本流、『美術カタログ論』(2005)が唯一であり類書はない。

本研究では、1769年第1回の展覧会以降の王立美術院展覧会カタログ、芸術家協会(Society of Artists)および芸術/技術振興協会(Society of Arts, Manufactures, and Commerce)など、18世紀からロマン主義時代にかけての美術協会カタログを詳しく検討し、「言葉」による「美術作品」の「説明」つまり「エクフラシス」の特徴を探る。その際、Blake の 個 展 カ タ ロ グ *A Descriptive Catalogue* (1809)、王立美術院の絵画教授(後に追放)であった James Barry が、芸術/技術振興協会のために描いた大作7点の解説 *An Account of a Series of Pictures In the Great Room of the Society of Arts, Manufactures, and Commerce* (1783) や彼の一連の美術講義、James Ward が自作に付した解説 *The Waterloo Allegory* (1821) などをエクフラシスとみなしとくに詳しい分析を施し、18世紀後半から19世紀にかけてのエクフラシスの特徴を明らかにする。この他、*Public Advertiser* など当時の第一次資料を、British Library, Victoria and Albert Museum, Royal Academy of Arts などから大量にマイクロフィルム等の形で取り寄せあるいは直接海外で蒐集し、それらの解説・解析を通して、美術カタログ、公共展覧会、個展、芸術家、観者(spectator)等を巡る諸々の力関係、当時の政治的状況や商業的状況に関わる諸問題をも詳しく検証し分析する。そうした上で、美術史に関わるエクフラシスと詩人たちによるエクフラシスの相関関係を吟味し、双方の言説の分析を通して、エクフラシス理論の構築を目指す。

3. 研究の方法

(1) 姉妹芸術およびエクフラシスに関する文献を読む。

① *Elder Philostratus, Younger Philostratus: Imagines Callistratus Descriptions* (Loeb Classical Library); William Blake, *A Descriptive Catalogue* (1809); James Barry, *The Works of James Barry* (ed. Edward Fryer, 1809); *An Account of a Series of Pictures In the Great Room of the Society of Arts, Manufactures, and Commerce, at the Adelphi* (1783); *Lectures on Paintings, by the Royal Academicians, Barry, Opie, and Fuseli* (ed. Ralph Wornum, 1848); William Bowles, "On a

Landscape by Rubens”; William Wordsworth, “Elegiac Stanzas Suggested by a Picture of Peels Castle, in a Storm, Painted by Sir George Beaumont”; sonnets; P. B. Shelley, “On the Medusa of Leonardo da Vinci, In the Florentine Gallery”, Robert Browning, “My Last Duchess”などはこの研究課題の代表的な基本資料である。

②上記エクフラシスの対象となった絵画作品や彫刻などを可能な限り多数の画像を入手する。他の図像・図版（銅版画ほか）も可能な限り入手し、エクフラシスとの関係を解説する。資料等の整理等には院生を雇う。

③王立美術院、芸術家協会、芸術/技術振興協会、ディレッタント協会 (Dilettanti Society) 関連の文献、とくに王立美術院批判、18～19世紀の美術制度、イングランドの芸術の現状、パトロン、政治と美術制度などに関わる文献を幅広く渉猟し、姉妹芸術、エクフラシスの観点から読み解く。具体的には、James Barry, An Inquiry into the Real and Imaginary Obstructions to the Acquisition of the Arts in England (1775); A Letter to the Dilettanti Society, Respecting the Obtention of certain Matters essentially necessary for the Improvement of Public Taste, and for accomplishing the original Views of the Royal Academy of Great Britain (1798); The Connoisseur: A Satire on the Modern Men of Taste (1753); John Gwyn, An Essay in Two Parts, on the Necessity and Form of a Royal Academy for Painting, Sculpture, and Architecture (1764); Robert Strange, Inquiry into the Rise and Establishment of the Royal Academy of Arts (1775)などは、急いで読むべき文献である。

④王立美術院、芸術家協会、芸術/技術振興協会等、18世紀～19世紀の美術に関わる協会の展示美術カタログを可能な限り収集し、また絵画評などは、当時の新聞・雑誌 (Public Advertiser, Gentleman’s Magazineなど) やパンフレットに博捜しこれを収集し解説する。資料整理等には院生を雇う。

⑤ イギリスへ資料収集に出かけ文献の充実を計り、また関連学会に出席することで知見を広めまた情報交換をする。

(2) 国内に文献がない場合は、大英図書館、ヴィクトリア&アルバート博物館、テイト・ギャラリー、王立美術館、ケンブリッジおよびオックスフォード大学図書館等から、マイクロフィルム等の形で取り寄せ、コピー・製本し読みやすい形にする。その他、文学作品も含めて、ECCO (Eighteenth-Century Collection Online) 等にアクセスし、ステック・メモリに蓄積しコピーする。

(3) エクフラシス関連の研究書や論文、関連ジャーナルを数多く入手し精読する。

(4) 入手したデータや分析した結果を主題・項目ごとにまとめ、必要に応じてコンピュータ入力する。

4. 研究成果

(1)

①画家 Joseph Wright of Derby (1734-1797) 作品の特徴をルナー協会や近代科学、産業革命との関連で浮き彫りにし、次いで Josiah Wedgwood の依頼によって描かれた《コリントスの乙女》 (The Corinthian Maid, 1785) は、詩人 William Hayley と画家 Wright of Derby の共同作業によるものであり、それは西欧文化に連綿と続く「姉妹芸術」という伝統の実践であることを確認した。Hayley が Wright of Derby に宛てた書簡には、「彼女 (コリントスの乙女) は一歩か二歩退がったほうが、影がよく見えると思いますし、この絵を見る人にもはっきりとわかるにちがいありません。少なくとも眠る彼 (若者) の頭は動きを止めないので、暗い壁に映った頭の影の輪郭は、頭がもっとまっすぐな位置を保っている間に、先の尖った道具で白く辿ります……」とあり、実に事細かである。このような具体的な「画家への指示」は、結局は、《コリントスの乙女》という絵画作品のエクフラシスの機能を果たしている。

②1816年、ナポレオン戦争時に Napoleon Bonaparte (1769-1821; 在位 1804-15) によって収奪された美術品の多くが、イタリアに返還された。この年、イギリス・ロマン主義時代を代表する女性詩人 Felicia Hemans (1793-1835) は、美術品返還に触発されて、美術品のイタリアへの「移動/帰還」を言祝ぐ作品『美術品のイタリアへの返還——ひとつの詩』 (The Restoration of the Works of Art to Italy: A Poem; 以下『返還』) を出版した。また Thomas Bruce, 7th Earl of Elgin (1766-1841、オスマン帝国大使) が、ギリシャから持ち帰った《エルギンの大理石彫刻》 (Elgin Marbles) と称されることになる彫刻群を英国政府に売却し、国内に論議を巻き起こしたのも 1816年のことであった。ヘマンズ作品『返還』と《エルギンの大理石彫刻》を対象とした『近代ギリシャ』 (Modern Greece, 1817) は、「美術品の移動」をめぐるエクフラシス作品である。エクフラシスの詳細な分析を通して、美術品の移動と戦争、帝国、政治等々に対するヘマンズの姿勢さらには当時の英国美術界の状況を明らかにした。『返還』においては、帝国は滅びるが芸

術は帝国と共に「移動」させられながらも生き延びるというモチーフを浮き彫りにされていることを指摘した。

③ William Blake(1757-1827)の作品は、言語テキスト(詩文)と視覚テキスト(挿絵)から成る。Blake作品のテキストとイメージの双方向的関係がより鮮やかに読み取れるのが、『エルサレム』(Jerusalem, 1804-27)のなかの「ユダヤ人へ」(“To the Jews”)と題された次の一節である。

So spoke London, immortal Guardian!
I heard in Lambeths shades:

In Felpham I heard and saw the
Visions of Ablion

I write in South Molton Street, what
I both see and hear

In regions of Humanity, in Londons
opening streets. (Jerusalem 34[38]: 40-43)

引用箇所を要約すると、「私=Blakeは、ランベスやフェルパムでアルビオン(イギリス)の幻=ヴィジョンを見た。そしてロンドンに戻った私は、サウス・モルトン通りの自宅から、ロンドンの通りで起こっていることを「見」「聞き」、それを「書いて」いる」となる。つまり巨人アルビオン(イギリス)の幻想を目の当たりにしながら、Blakeは、それをペンとペンシル(鉛筆)で書きかつ描き分け、記録し、言語テキストと視覚テキスト双方から成り立つ作品『エルサレム』を生み出したという。引用箇所においては、「声・まなざし・テキスト」の三者が、Blakeの創造行為の過程で密接に絡み合った関係をなしていることは明らかであり、そのような観点からBlakeの言語テキストをエクフラシスとして捉える必要がある。

(2)

Robert Hooke(1635-1703)の『ミクログラフィア』(Micrographia, 1665)は、118点の図版と60の顕微鏡観察記録から成る。『ミクログラフィア』の顕微鏡的表象は、顕微鏡観察対象物の「正確な図・挿絵」と「正確な実験観察記録」のふたつから成り、「言葉とイメージ」の双方向的関係がつねに問題となる。顕微鏡観察記録に関してHookeの念頭にあったのは、おそらく対象物を「生き生きと目の前にあるかのごとく言葉によって描写すること」つまりエクフラシスの精神であった。顕微鏡観察記録は、平均語数2700、最短でも100語、最長は13000語にも及ぶ。Hookeの記述には、ウィットもあれば地口も仕込まれている。正確な記述から省察へ、時には審美的あるいは宗教的思索・瞑想へと記述は流れる。『ミクログラフィア』における顕微鏡的表象を構成するこれらふたつの要素のうち顕微鏡観察記録は、

図・挿絵と絶えず緊張関係のもとで理解すべき、エクフラシスの一変奏である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

① 鈴木雅之. “In Felpham I heard and saw the Visions of Albion”-ブレイクにおけるヴィジョンと「書物戦争」、『19世紀学研究』、第2号、平成21(2009)年、19-38ページ。査読有。

② 鈴木雅之. ホイットマンの親戚—スウェーデンボリ、コンウェイ、ブレイク。『英文学評論』第81集、平成21(2009)年、41-71ページ。査読無。

③ 鈴木雅之. 「誠実な手と忠実な眼」—顕微鏡的眼の方法序説。『英文学評論』第80集、平成20(2008)年、1-36ページ。査読無。

④ 鈴木雅之. ロマン主義時代のエクフラシス—フェリシア・ヘマンズの場合。『英語青年』第153巻第4号、研究社、平成19(2007)年、200-203ページ。査読有。

⑤ 鈴木雅之. 詩人、画家、陶芸家の饗宴—《コリントスの乙女》と絵画および陶芸の起源。『英文学評論』第79集、平成19(2007)年、39-68ページ。査読無。

[学会発表](計6件)

① 鈴木雅之. ブレイクのマーヅナリア。京大英文学会。平成21(2009)年11月9日。京都大学文学研究科。

② 鈴木雅之. 「一粒の砂に世界を一輪の野の花に天国を」—顕微鏡とイギリス・ロマン主義文化。日本シェリー研究センター第17回大会。平成20(2008)年12月6日。東京大学山上会館。

③ 鈴木雅之. ホイットマンの親戚—大西洋にかける橋。日本英文学会第80回大会シンポジウム。平成20(2008)年5月25日。広島大学文学研究科。

④ 鈴木雅之. ブレイクにおけるヴィジョンとテキスト。19世紀学研究所主催第2回国際シンポジウム。平成19(2007)年11月18日。新潟市イタリア軒。

⑤ 鈴木雅之. ロマン主義時代の美術と政治—Blake, Barry, Reynolds. イギリス・ロマン派講座. 平成 19(2007)年 6 月 9 日. 早稲田大学文学部.

⑥ 鈴木雅之. “Fit audience find tho’ few” : A Descriptive Catalogue Revisited. Blake at 250. 平成 19(2007)年 8 月 1 日. York University.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 雅之 (Suzuki Masashi)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号 : 50091195